

幼児教育研修（発達支援）

受講者数 75名

日時 令和4年11月10日（木）14:30～16:30

場所 ギャラクシティ 西新井文化ホール（上映会形式）

講師 和歌山大学 教育学部 教授 米澤 好史 氏

【内 容】～愛着障害と発達障害の理解と愛着の問題への支援～

愛着障害とは、特定の人と結ぶ情緒的なこころの絆（愛着・アタッチメント）の形成が不十分、または、崩壊している状態で、年齢を問わず誰にでも起こりうる関係性の障害です。愛着障害は、いつでも誰にでも修復が可能であり、保育者が子どもと愛着関係を結ぶことで、親子関係の修復や子どもの行動の変化につながります。愛着障害と発達障害の違いを理解し、愛着障害の修復プログラムや支援について学びます。

【受講者の感想】

* 研修で学んだことを保育にどう活かしていきますか

- ・毎日関わる保育者が子ども一人一人を理解し、子どもの行動から見えてくる理由や原因を見逃さず、丁寧に対応していく。
- ・子どもにとって、3つの基地（安全・安心・探索）と思える存在になれるように頑張りたい。
- ・その子のすること（楽しんでいること）を一緒にして気持ちの共有をし、感情を育てる支援をしていきたい。「同じ気持ちでいる」と子どもに感じ取ってもらえるような言葉や仕草で思いを伝え、心の絆を作っていく。
- ・アピール行動や試し行動、愛情欲求のエスカレート現象に戸惑い、どうしても振り回されてしまいがちだが、安全・安心基地となる関係を築きつつ、先手の支援・子ども主体で大人主導の働きかけを考えていきたい。
- ・気になる行動を止めさせたいと思いがちだが、愛着障害の観点から支援方法を考えていきたい。
- ・愛着障害なのか発達障害なのかを見極め、職員間で共通の理解と支援ができるように話し合う。
- ・我々大人ですら「この人という安心」と思えることがある。子どもにとってそうした「人」が大切であることは言うまでもない。そうした観点からも子どもに心を開き、「大切に思っている」を伝える保育をしたい。
- ・愛着障害への理解が深まり、間違った認識を改められた。また、子どもに対する適切・不適切な対応を知ることができ、今後に活かしていきたい。
- ・自分を守ってくれる存在がいることが必要と学んだ、愛着障害をもった子だけではなく、どの子にもあてはまる。そのような存在になりたいと思った。